

第77回大腸癌研究会

プロジェクト研究・最終報告

「大腸鋸歯状病変の組織学的分類と癌化のポテンシャルに関する研究」

研究代表者： 八尾隆史（順天堂大学医学部人体病理病態学）

日時：2012年7月5日（木）10:00～11:00

場所：ホテル日航東京

<研究成果>

1. SSA/P (sessile serrated adenoma / polyp)の診断基準の作成

SSA/Pは、明かな腫瘍とは判定できない鋸歯状病変で、①陰窩の拡張、②陰窩の不規則分岐、③陰窩底部の水平方向への変形（逆T字、L字型）のうち2因子以上を、病変の10%以上の領域に認めるものとする。

2. SSA/Pの癌化の頻度

各施設からSSA/Pに相当すると考えられた症例のプレパラート合計245例が収集され、そのうち上記診断基準に適合する病変は139例であり、そのうち4例（2.9%）に癌の併存を認めた。その後、追加で収集されたSSA/Pの診断基準を満たす133例中5例（3.8%）に癌の併存を認め、合計すると272例中9例（3.3%）に癌の併存を認めた。

収集したSSA/Pにおける癌併存率は3.3%であったが、標本収集において一定の基準を設けていなかったため、SSA/Pの正確な癌化率を反映しているとは言えないが、少なくともSSA/Pの癌化例がある程度は存在することが判明した。

<まとめと今後の課題>

このプロジェクト研究で、SSA/Pの病理組織診断基準を作成し、ある程度のSSA/P癌化率を示すことができ、今回で終了することにした。

そして、SSA/Pの癌化率をより正確に評価するには、たとえば“5mm以上の開II型ピットを有する病変を切除する”というような一定の基準を設けた材料の収集が必要で、新たなプロジェクト研究の必要性について議論がなされた。